

滝田樗陰

夏目先生と書画

夏目先生と書画（抄）

〔前略〕

先生が書画に志されたのは、恐らく今から十数年前からのことだと思ふ。当時書画に興味の乏しかった僕などは、うっかり気が附かずにいたけれども「吾輩は猫である」の中にも主人公が猫の写生をやって、あの口の悪い猫から散々罵倒されている所があつたようだから、あの前から、既に幾らかずつやつて居られたものと見える。その後、水彩画も可なり熱心にやられたそうだ。その当

時の物は、今、小宮君の手にあるとの話である。

また野上きゆうせん白川氏せんの家で見た極密の竹林兼松林けん山水の如きは、その一部に不手際なところがあるに拘らず非常な苦心の作で、こんな密な物を先生は何時いつ書かれたろうと白川氏に聞いたら、今から三、四年前に書かれたとのことだから、先生の書画の道に志されたのは、僕が何うようになつた数年前からであることは疑いない。然し本当またに熱心になつて、その熱心の程度が側の人を驚かし且かつ又その上達の著しく目に見えて、専門の書画家をして殆ほとんど驚嘆の声を発せしめるようになったのは、最近一年

間のことではないかと僕には考えられる。

熱心と云えば、先生の書画熱というものは、随分高かった。その熱度の百度以上の患者たる僕をさえしばしば驚かした程である。こう云うことを言っただけで好いか悪いか分らないが、僕から見れば先生の近来の本当の興味は小説を去って書画に移っていたと云いたい位いだ。現に「明暗」を書かれる一ヶ月前に、微恙びようの為に臥床されていた時に、小説の趣向はもう出来ましたかと訊いたら――

「まだ何にも考えていない、実は画のことを考えて、小説が終わったならば、三幅対の大作を一つやりたくって

漸く考案が纏まった」

と、云うようなお話があつたのでも、そう思われる。

また池辺三山氏の書を非常に褒めて、日本では徳川時代にもそれ以後にもあの位いの人は無いと云つていられた。そして何処どこかで三山氏の画も見られたそうで、「画もまたうまい、あの男は書画をやれば確かに日本一になつた、新聞記者などになつて惜しい事をしたものだ。尤もつともそう云つたら池辺は屹度きつと書画なんかは士君子の末技だとか余技だとか云つて怒るだろうが、僕にはどうも新聞記者よりも其の方が好かつたように思う」と言われて居お

ったのでも、先生の興味の在るところが分ろう。

また僕も現に先生に対^{むか}って、——

「先生のこの頃の興味の中心は小説よりも書画にあるようですね」と言った。と、

「そりやそうさ、一方は商売で一方は道楽なんだから、話だって商売よりも道楽の方が面白いんだよ」

と言って居られたので益々^{ますます}明らかである。

先生の書は、書体はいろいろに変わっていて——即ち肉細の細長い字があったり、又肉太の円味を帯びた字があったりして、一見しては全く別人の手になったような物

があつて、一概に云うことは出来ないけれども。大体坊主臭い字のように思う。俗字と云うのは先生の最も嫌われたもので、吾々が見て相当に好い文字だと思ふものでも、これは俗字でいかんいかん、実にいかんと云うような批評をよく下された。

坊主臭いと云つても、先生の最も好く親しまれたのは、松山の明月和尚、越後の良寛、この二人の物はしょうがん大分賞翫おうぼくもされ、また亦時には稽古もされたように思う。また黄檗おうぼくの物も大分好きであつたようだ。先生の書かれる物には時として良寛風に見えたり、明月風に見えたり、或いは

黄檗の坊主らしい物も多いようだ。尤も近来は「書苑」やその他の法帖ほうじょうなどを大分集められて、色々な書風に就て種々研究を重ねられたようであり、従って時として随分変わった書風も試みられたようだが、全体として見れば何うしても先生の書には禅坊主らしい風格が最も多いようである。



先生は長鋒ちようほうの筆を好まれて、吾々の使う物の二倍もあるような長い毛を自由に操られて、一点一画にも細心の注意を払いながら、心静かに書かれた。僕自身の趣味

から云えば、もつと大胆に、もつと豪放に一気に揮灑きさいされた方が好いと思つて、ときどきそのことを申したこともあるが、そう一気に書かれることは極めて稀れで多くの場合は、一字一字、或は一線一線、考え考え書かれると云う風であつた。

けれども、それだからとて、筆に勢いがないと云うのではない。落着いた、品の好い、位置の正しい物を書かれるのが先生の御趣意で、僕等が見て筆力奔放など思ふものは、恐らく先生には虚勢を張つたように見えたり、或いは俗気紛々たるもののように見えたりらしい。

先生はよく「どうしてこうまずいのか、今少しうまい筈だ」と云って、自分の書かれた物に多くは満足の意を表わされなかった。然しそれは先生の理想の標準に照して自ら卑下されるのであって、他の人の文字よりも悪いと云う意味では決してない。現代の人で、先生の褒められたのは、前に言った三山氏位くらいの者で、大抵の人のはいかんいかん」とか「ごまかしだね」とか云って、中々容ゆるされるものではなかった。

そして又口癖のように、僕は少し稽古すると書に就ては自信があるとか、今に見てい給えもつとうまくなるか

らとか言つて居られたから、今四、五年も或いは今一、二年でも生きて居られたら確かに今よりもずっと上達されただろうと思う。尤も今の物でも我国の現代のうちでは最も脱俗高雅の文字で、真に眼識ある人士の驚嘆を博するに足り、後代に至つては益々ますますその光輝を発する物たることは疑を容れないところである。



先生が御自分の書かれる書画を苟いやしくもされないことは非常なもので、気に入らないものは何枚でもズタズタに裂いて、誰が何と云つても決して之を人に渡されな

った。尤も、余り親しくない人に義理づくに書かれる場合には多少意に満たない物でも渡されたようであるけれども、僕等には先生の氣に入らない物は絶対に渡されなかつた。紙を十枚持つて行つて、二枚も出来るのは上乘の成績の方で、大抵一枚位いのことが多かつた。甚だしきは、半截はんせつを一枚書くに十五枚の紙を書きつぶされたことがあつた。そうなると紙の惜しいと云うよりも先生の骨折られるのが氣の毒で、「もう大抵でいいでしょう」と言つても、先生は中々きかれなかつた。も一枚、も一枚と云つて、紙の有りだけ書いて終しまうまでは決して承知さ

れなかつた。

二、三年前の「日本美術」の口絵になつて出た、先生が横山大観画伯に贈られた書の如きは、絹を十枚書きしくじられて、どうしても絹は駄目だと云うんで、今度は紙に書き加えられた。つまりあれは十一枚目ださうである。

僕が屏風の二枚折いっそう一双（全紙四枚）を書いて貰う為めに費した紙は無慮むりよ六十枚前後で、三、四回続けて十五枚乃至ないし二十枚を持って行って、辛うじて出来たものである。又「ききよらいのじ歸去来辞」の卷物も三度書き代えられたが、その

前に稽古の意味で書かれた紙を入れると、やはり巻物に要した紙の二十倍以上費して居る。

そんなに書かれても、その中で先生の最も気に入ったの一枚だけを下さるので、他は皆いくら側で惜んでもべたべたと棒を引いて、それから一字も完字のないようほど迄にこまごまに千切ちぎられるのを例とこした。その一枚を扱えらむにも絶対に先生の眼識に依るので、他の人々が皆挙こぞつて他の物を扱んだところで先生は頑として動かさないで、「もしそれが厭なら止せ」と言われた。

自分の書いた物を如何に大事にせられたかの一端は、

今の話でも分るだろう。

先生が他人の書に感服せられなかつた事は前にも言つたが、先生のお宅によく見えた森と云う人にやられた手紙に依ると、僕が先に先生の私淑して居られたと云つた彼の明月和尚の書を批評せられて、近来は余り感服しなくなつたと云うようなことを書いてあり、また正岡子規などもモツト生きていたら明月のように成つただらうと書いてあるそうだ。つまり晩年の先生は勿論子規や明月よりも遙かに上になつて居ると自覚して居られたように書いてあるそうだ。これは又また聞きに聞いたことである。

いずれ、こう云うことは先生の書簡集の公けにされる時に明かになるだろうと思う。

曾^{かつ}て伊達家の第二回売出しの時であった。先生も見に行かれたが、そこには一休の書があった。それが二千円か三千円かで売れたと云う噂を聞いて先生は、それを評して、「何処^{どこ}が好いのか、僕があれを貰ったら糞を拭いてしまう」と激語を発せられた。

それから僕が虚子の短冊を持って行って、「実に気持ちの好い文字ですね」と言ったり、桂月^{けいげつ}の書は厭味がなくて良いと言ったりしても、どうしても先生は余り褒めら

れないで、例の通り「ごまかしだね」と言われた。

△

話が余り長くなるから画のことに就ては簡単に申しませんが、僕の最も多く書いて頂いたのは、四君子しきんしがおもで、短冊とか色紙とか或いは半截とかにその四君子を書いたものは可なり多く有もって居る。中でも竹が一番先生のお気に入りのもので、色々な格好の竹を自由自在に書かれた。蘭は僕が昨年半截に書いて頂いた時に、「蘭を書くのは生れて初めてだ」とのお話であったが、百穂画伯ひやくすいや素明画伯そめいなどは、その初めて書かれた蘭を非常に敬服

して居られたし、その後色紙に写生をして頂いたりなんかして蘭も数多く書かれたがどうも竹ほどにはうまくないように僕には考えられる。

梅は最初のうちは最も困難を感じて居られたが、何時の間いつに稽古きこされたのか、近来は非常にうまくなって、古木も、稚木わかきも垂枝しだれも直枝も自由に書れたようである。「中略」

蘭は不思議にも初めからうまくて、書でも画でもあの位い書きしくじられる先生が蘭に於ては殆んど書きしくじられる事がなかったのはどう云うものか。かの陶淵明とうえんめい

の「採菊東籬下、悠然見南山」の詩句を愛誦された先生の気分とよくよく合って居おったものと思われる。

その他山水画にも大分研究を積まれて、この方面に於ては主として支那風のを狙われたようだ。支那の古代の名画の板本は大分集められて、これは最近の先生の最も心を喜ばしたものであるらしい。それらの影響が先生の画にも表われて。少し密な山水画を書かれるようになったが、その作品は多く支那趣味のものであった。

△

私の最も多く書いて頂いたものは、以上のように水墨

を主とした四君子の様なものであるが、この以外に先生は長い閑のある時分には、五日も六日も家の内に閉じ籠って、着色の極密の山水を試みられた。それはモウ非常な大努力で、その三、四幅はお宅に深く蔵して居られるようだ。僕もその二、三幅を拝見したことがあるが、水墨の四君子とは又違った味のあるもので、他日先生の書画集でも公にされることがあったら、その苦心と努力とで世間を驚かすに足ることと思う。

（『新小説』臨時号、大正六年一月）

日本文学電子図書館

夏目先生と書画 (抄)

著 者：滝田栲陰

制作者：宮澤一郎

底 本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行

日本文学電子図書館